

5月17日（日）サムエル記第二11章1～5節

「ある夕暮れ時、ダビデが床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、一人の女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。」（2節）

年が改まり、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエル全軍を送り、彼らはアンモン人を打ち負かし、ラバを包囲しました。しかし、ダビデはエルサレムにとどまり、2節では「ある夕暮れ時、ダビデが床から起き上がり」とありますので、恐らく昼寝をしていたのでしょう。そして王宮の屋上を歩いていると、一人の美しい女性がからだを洗っているのが屋上から見え、ダビデはその女について調べさせ、使いの者を送って、その女を召し入れ、彼女と寝て姦淫の罪を犯しました。そして女は身ごもり、ダビデに「子を宿しました」と告げたのです。

10章18節を見ても、ダビデは率先して戦いに出ていました。なぜここでダビデが戦いに出ないで、王宮にいたのかは分かりません。しかしヨアブをはじめ、イスラエルの全軍が命がけで戦っていた時に、ダビデは王の特権を行使しながら、時間をつぶしていたのです。まさに緊張感のなさが罪の入り口となったと言えます。そして、主の恵みとあわれみにより、王権が確立し、周辺国からの脅かしが少なくなってきた時に、ダビデは罪を犯しました。アダムとエバが罪を犯したのは、エデンの園でした。悪がはびこる中で誘惑されたのではなく、貧しさのゆえに罪を犯したのでもなく、主によってすべてのものが整えられ、足りないものなど何一つない場所にあって、彼らは不服従の罪を犯しました。私たちも、主の恵みと祝福を十分にいただいている時にこそ主に対して罪を犯さないように気をつけなければなりません。罪の芽は至るところにあります。

5月18日（月）サムエル記第二11章6～8節

「ダビデはウリヤに言った。「家に帰って、足を洗いなさい。」ウリヤが王宮から出て行くと、王からの贈り物が彼の後に続いた。」（8節）

バテ・シェバは身ごもったことを知ると、ダビデに人を送って「私は子を宿しました。」と告げさせました。ダビデ王は与えられている権威をもってさまざまなことをなすことができましたが、姦淫の罪とその結果によるバテ・シェバの妊娠をなかったことにする権威までは持ち合わせていませんでした。誰であっても罪を犯したなら、その結果も刈り取らなければなりません。もしかすると自分の罪が誰にも気がつかれないかもしれませんが、しかし、主はすべてをご存知であって、罪に対してふさわしくさばきを下されるお方であり、その結果を私たちは甘ん

じて受けなければなりません。そのことをおぼえて、私たちは決して罪を軽く考えることなく、罪を犯すことを恐れて主の御前に聖い歩みをなさなければならないことを思わされます。

主は、どんな罪であっても心から悔い改めるなら赦してくださいます。ですから、バテ・シェバから妊娠を知らされた時点でダビデは姦淫の罪を認め、主の御前に心から悔い改めるべきでした、そうすれば、彼の罪は赦されたはずです。しかし、ダビデは自分の罪を認めて、悔い改めるのではなく、王としてのプライドがあったからでしょうか、逆に何とかして自分の姦淫の罪を隠し通してなかったことにしようとしたのです。ダビデは、ヨアブのもとに人を送ってウリヤを自分のもとに送らせました。7節でダビデはウリヤに、ヨアブは無事にいるか、また兵たちは無事にいるか、さらに戦いはうまくいっているかと尋ねていますが、ウリヤの答えは記されておらず、全く会話になっていません。このことについてフォッケルマンという学者が、「ウリヤの答えた言葉が物語の中に記録されていない。・・・これは、ダビデが彼にただ言わせているだけで、彼の話の中身に何の関心も持っていないことを象徴している。」と言いました。むしろダビデの関心事は、「家に帰って足を洗いなさい」というところにあったのです。これは長旅の疲れをいやすようにということですが、その後でダビデは贈り物をする事で、ウリヤが気を良くして、自宅でくつろぎ、妻と過ごすことを目的としていたと推察できます。そのようにしてバテ・シェバの妊娠は、ウリヤとの性交によると思わせたかったのです。

人はダビデのように何とかして自分の罪をごまかそうとするかもしれません。そして、実際にごまかすことに成功するかもしれません。しかし人の目はごまかすことができても主の目をごまかすことはできません。すべてを知っておられる主を恐れ、主の御前に常に正しくあることを私たちは心がけるべきです。

5月19日（火）サムエル記第二11章9～13節

「神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私が家に帰り、食べたり飲んだりして、妻と寝るということができるでしょうか。あなたの前に、あなたのたましいの前に誓います。私は決してそのようなことをいたしません。」（11節）

ここで「自分の家に帰らなかった。」（9節）「ウリヤはその日と翌日、エルサレムにとどまることになった。」（12節）「しかし、自分の家には下って行かなかった。」（13節）と三回ウリヤが自分の家に帰らなかったが強調的に記されています。

ウリヤが自分の家に帰らなかったとの知らせを受けたダビデは「あなたは遠征して来たので

はないか。なぜ、自分の家に帰らなかったのか。」と問うダビデに、「神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私が家に帰り、食べたり飲んだりして、妻と寝るといことができるでしょうか。」と答えます。ウリヤは高潔な人物であり、戦いの最中にある自分の役割や立場を自覚していた人物でした。特に、ここで注目すべきは、神の箱も戦場にあったということです。これは、つまり主ご自身がイスラエルの民とともに戦っておられたことを意味しています。それなのに王であるダビデは王宮で昼寝をし、王宮の屋上をぶらぶら歩いていて、バテ・シェバが水浴びをしているのを見つけると、彼女を呼び入れ、姦淫の罪を犯したのです。ウリヤは、まさに主と一つとなっていました。ダビデは主と一つとなっていなかったために姦淫の罪を犯したのです。それと同時に、ダビデに呼ばれたことで戦場からは離れていましたが、ウリヤの心はアンモン人と戦っていたヨアブや他の兵士たちと心をつにしていました。ところが、ダビデは戦いをヨアブや兵士たちに任せて、王であるにもかかわらず、まるで自分は戦いとは何の関係もないかのような態度でした。私たちも他の兄弟姉妹たちとの深い交わりの中で、信仰により心をつにし、互いに励まし合い、祈り合うことがなければ簡単に罪の誘惑に陥ってしまうことでしょう。そのためにも教会の中で孤立してしまう人があってはならないのです。教会の交わりに何の意味があるのかと思うかもしれません。人といると疲れるといふ人があるかもしれません。時間に追われるような生活をしておられる方がいるかもしれません。しかし、ふとした会話の中で私たちはお互いをさらに深く知っていくことができるはずです。そして、もちろん何ができるわけでもありませんが、「祈りましょうか」と一声かけて互いに祈る中で、私たちの交わりがさらに豊かに祝福されていくことを心から願います。

5月20日 (水) サムエル記第二11章14～17節

「その町の者が出て来てヨアブと戦った。兵のうちダビデの家来たちが倒れ、ヒッタイト人ウリヤも死んだ。」(17節)

バテ・シェバとの姦淫の罪を隠ぺいするためにダビデはウリヤを家に帰そうとしましたが、職務に忠実な兵士であったウリヤは決して自分の家に帰ろうとせず、それに二度失敗するとダビデは別の企てを実行します。

朝になって、ダビデはヨアブに手紙を書き、それをウリヤに託して送りました。その手紙の内容は、「ウリヤを激戦の真っ正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が討たれて死ぬようにせよ。」(15節) というものでした。国のために戦うウリヤを敵の手を借りて意図的に彼

を殺害させようという、ある意味間接殺人とさえ言えます。ダビデが姦淫の罪を決して悔い改めようとせず、逆に隠ぺいしようとしたことにより、ダビデは別の罪を犯すことで、ますます罪の深みにはまっていく様子を私たちは今日の箇所から見ることができます。私たちも罪を悔い改めず、それを隠そうとするなら、その罪が必ず別の罪へとつながっていきます。もし罪を示されたなら謙遜に自分の罪を認めて悔い改めましょう。御子イエス様の十字架の血により主は私たちのどんな罪でも赦してくださいます。

16節では、手紙のままではありませんが、(注:「彼を残してあなたがたは退き」ということは実行していない。) ヨアブはウリヤが戦死しやすいような場所に配置したのは間違いありません。ある意味ヨアブは、ダビデの罪に加担したと言えるでしょう。もしヨアブがダビデから送られてきた手紙に対して何らかの疑問をもって対処すれば、ウリヤの命は救われたかもしれません。私たちは霊的に目をさまし、注意していなければ、何らかの罪に加担させられる可能性があります。人の中傷に同調すれば、それも罪に加担することになるでしょうし、はっきりと言わないことで誰かが罪を犯せば、それも罪に加担したと言えます。罪に加担する者ではなく、教会や周りの兄弟姉妹の罪の悔い改めへと導くような信仰者でありたいと思わされます。

5月21日(木) サムエル記第二11章18～25節

「あなたは彼を力づけなさい。」(25節)

手紙のこともあり、ヨアブは人を遣わして、戦いの一部始終をダビデに報告します。20節を見ますと、町に近づいたため、城壁の上から敵の兵士が矢を射かけたことによって死んだことが分かります。21節の「エルベシェテの子アビメレクを打ち殺したのは、だれであったか」というのは、士師記9章52～54節に記されていることですが、アビメレクがやぐらの入り口に近づき、これを火で焼こうとしたら一人の女がアビメレクの頭めがけてひき白の上石を投げつけて、彼の頭蓋骨が砕かれた事件のことです。さらに、どうして、そんなに城壁に近づいたのかと言われたら、『あなたの家来、ヒッタイト人ウリヤも死にましたと言いなさい』と言います。これは、ヨアブとダビデの間だけで通じることで、要はヨアブからすれば、ダビデが望む通りのことをきちんと実行したということと言おうとしたのです。使者は出かけて行き、ダビデのところに来て、ヨアブの伝言をすべて伝えました。そして24節で使者もダビデにウリヤが死んだことを告げました。ウリヤの死を知り、ダビデは安堵したことでしょう。そして、自分の姦淫の罪は闇の中へと葬られたと思い、ほっとしたかもしれません。しかし、ダビデ本人以外に彼の罪を知っていた方がおられます。それは主なる神様です。神様は私たちの隠れた罪もす

べてご存知です。主の前に隠すことのできる罪は何もありません。ですから、私たちも自分の罪を隠そうとするのではなく、むしろ素直に自分の罪を認めて、主の御前に心からの罪の悔い改めをもって罪の赦しを願う者でありたいと願います。主の御前にあつて問題なのは、私たちが罪深く、罪を犯しやすい者であるということではなく、決して主の御前に罪を認めて悔い改めようとしなない頑なな心なのです。

5月22日（金）サムエル記第二11章26，27節

「しかし、ダビデが行ったことは主のみこころを損なった。」（27節）

26節でウリヤの戦死の知らせが妻のバテ・シェバにも伝えられました。バテ・シェバは自分の夫のために悼み悲しみます。喪が明けると、それを待っていたかのようにダビデは人を遣わしてバテ・シェバを王宮に連れて来させ、バテ・シェバは彼の妻となり、彼女は息子を産みました。そして、最後に「しかし、ダビデが行ったことは主のみこころを損なった」と一言添えられています。本来であれば、女性が王宮に呼ばれて、王の後となり、身ごもって男子を産むならば、それは王にとっても、また国全体にとっても大きな喜びとなりますが、今回のバテ・シェバの妊娠と息子の誕生は決して祝福とはならず、むしろ主のみこころを損なうこととなったのです。罪は決して祝福とはなりません。むしろ罪は人にわざわいをもらします。私たちは日々の歩みの中で主のみこころを損ねていることはないでしょうか。罪によって主のみこころに反するようなことをしてはいないでしょうか。主は、私たちを大いに祝福することを願っておられるあわれみと恵みに満ちた神様です。ところがもし私たちが罪を犯し、それを悔い改めようとしなければ、神様がいくら祝福を注ごうと願われても、決して祝福することはできません。私たちが祝福された歩みをするために必要なことは、罪を悔い改めて、主と正しい関係をもって歩むことです。私たちは、日々主から祝福を受けられるような歩みができているでしょうか。今日、そのことを主の御前に自らを顧みてみましょう。

5月23日（土）サムエル記第二12章1節

「主はナタンをダビデのところに遣わされた。」（1節）

エジプトのような国においては、王は神とみなされていましたが、イスラエルにおいては「必ず、あなたの神、主が選ばれる者をあなたの上に王として立てなければならない。」（申命記17章15節）とありますように、王は主が選んだ者でなければなりません。それと同時に、

「その王国の王座に就いたら、レビ人の祭司たちの前にある書から自分のために、このみおしえを巻物に書き写し、自分の手もとに置き、一生の間これを読まなければならない。それは、王が自分の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばと、これらの掟を守り行うことを学ぶためである。それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることのないようにするため、また命令から右にも左にも外れることがなく、彼とその子孫がイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるようにするためである。」(申命記17章18～20節)と、主の教えを守り行うことが求められていました。それは王が自分の神、主を恐れるためであり、長くその王国を治めるようになるためでした。そして、王が主のみおしえのことばを守らず、その命令から外れたなら、それをいさめるのが、預言者の大切な役割でした。ですから、サムエルもサウル王の罪に対して厳しく叱責しています。(サムエル記第一13章11～14節、15章13～23節参照)そして、主は今回罪を犯し、主の命令から大きく外れることをしたダビデのもとにナタンを遣わしました。それは、ダビデの罪を指摘し、その罪を悔い改めさせるためであり、主が選ばれた王としてのあり方を正すためでした。今の時代に主は、みことばの説き明かしのために、牧師や説教者を遣わされます。私たちは、その語られるみことばをどのように聞いているでしょうか。もし自分の罪を示されたなら、主の御前に素直に罪を悔い改めているでしょうか。それともサウル王のように心を頑なに立て、なかなか自分の罪を認めず、悔い改めようとしなないということはないでしょうか。